

症例を通しての『発症前生活歴』の重要性について

沼隈病院 リハビリテーション課

高山沙緒里 喜多村浩樹 加藤大樹

今回 70 歳代女性心原性脳梗塞（右 M C A 領域）の症例を担当した．本症例は介入当初，注意障害を中心とした高次脳機能障害が著明に見られていたが，その他で認知・精神の日内変動や幻視などの症状が見られ，食事，リハビリテーションに対して拒否的であった．

ケアマネージャー，他施設などから情報収集を行い，認知症，統合失調症の既往があったことが確認され，臨床症状の要因が明確化された．また発症前の趣味，前施設での様子から症例の好きな作業を用いた高次脳機能訓練，食事場面へのアプローチを行うことが出来て，症状改善が見受けられ，身体機能も向上した．また当院から専門病院への紹介に繋がった．

リハビリテーション職の専門性は機能訓練のみと思われがちであるが，疾病，身体，認知，精神，生活をつなげ思考できる点である．また生活により関わっていく作業療法士として発症前生活歴を明確にし，アプローチに活かしていくことが大切である．

症例を通しての 『発症前生活歴』の重要性について ～食事動作を通して～

社会医療法人社団 沼南会 沼隈病院
リハビリテーション部
高山沙緒里 喜多村浩樹 加藤大樹

1



はじめに

脳塞栓によりADLがほぼ全介助であった症例に対して
発症前生活歴をもとに好きなことである食事を中心に
アプローチを行った。

その結果、身体機能、精神機能、高次脳機能の改善
とともに食事摂取が可能となった。

2



症例基本情報

年齢：70代

性別：女性

発症病名：心原性脳塞栓（右MCA領域）
左不全麻痺、高次脳機能障害

3

全体像

- 日常会話は可能も、注意散漫さや精神状態の不安定さあり
会話がかみ合わないことや、指示が通りにくいことあり
- 入院生活はADLほぼ全介助
FIM：23/126点（運動項目13/91点，認知項目10/35点）
- 注意散漫で食事に集中できず左側のお皿を見ることができない。自力摂取では時間がかかるため、看護師にて全介助

4

情報収集①

【長男】

- 好きなことは食べること（特に果物）、花の観賞、散歩
- 入院前はADLは自立していたが、部屋が散らかったり、物の大量購入などの問題行動があった
- 5年前より幻覚、被害妄想などが見られた

5

情報収集②

【ケアマネージャー】

- 3年前に精神科病院で統合失調症と診断されたが、その後通院せず、服薬はしていない
- 急性期退院時に家族は施設入所を希望している

【入院前に利用していた通所サービス】

- 日中はゲームに参加したり、塗り絵などの作業を行っていた
- 注意散漫な様子は見られなかった

6

問題点と目標

高次脳機能障害
注意障害、左半側空間無視

左不全麻痺
Brs: I – I – II

精神機能
認知機能

食事の自力摂取困難

目標 食事の自力摂取

7

プログラム

1. 食事場面への直接的介入
2. 注意障害、左半側空間無視へのアプローチ
(本人の好きな「花」の活用)
3. ファシリテーション (左上下肢)
4. 起居動作訓練、端座位練習

8

食事動作への介入（注意障害）

- ◎カーテンを閉め外界からの刺激を制限する
- ◎別の場所に食器の蓋や名札を片づけて
食事に集中できるようにする



介入前



介入後

9

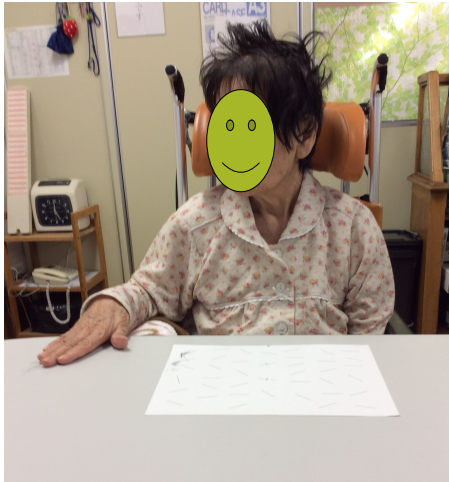
食事動作への介入（左半側空間無視）



果物を左側へ設置し、左側への探索をしやすくする

10

結果①（介入前と介入後の様子）



介入前



介入後

11

結果②（認識範囲の変化）



介入前：青色

介入後：赤色

12

考察

- 入院前情報は問題点、ゴール設定、プログラムを考えるうえで活用された
- 身体機能の向上、集中力の向上、高次脳機能障害の改善を図れたことで食事動作の獲得へ繋がった
- 食事摂取の改善は、生活にリズムが生まれ、他の心身活動への効果も考えられる

13

まとめ

好きなことへのアプローチ、好きなことを利用したプログラム
(食事)  (果物, 花)

リハビリに対する意欲向上、モチベーションの維持

生活により関わっていく作業療法士として
「発症前生活歴」を明確にし、アプローチに
活かしていくことが大切であることを学んだ

14